

第一内科

若い年代の血液疾患患者の看護から

発表者 奈良 佳代子

第一内科一同

I はじめに

現代医学の発展はめざましく、大きく流れている。毎日の濃厚治療・処置・検査の介助の中でややもすると、患者さんを忘れがちになりやすい現状である。又私達の日頃の言動が、病める人々にどれだけの支えとなっているだろうか、と、毎日のカンファレンスを重ねながら考えさせられる。こうした中に、高校生・浪人中の若い青年達が、予後不良である血液疾患で入院していた。精神的にも不安定な時期であり、老人・成人とは、違う問題点も多く、三つの症例を経験したので報告したいと思います。

II 患者紹介

1 患者A

- (1) 氏名・年齢 Y・K 18才 男性 大学浪人中
- (2) 入院年月日 S48. 2. 16
- (3) 病名 急性前骨髄球性白血病
- (4) 背景と性格 実母を幼少時になくし、継母を迎えている。本来は明るい性格であったが時々寂しい様子の時があり、人なつっこい面もあった。
- (5) 家族への説明 父兄姉(看護婦)本当の病名を知らせた。本人には溶血性貧血と云っている。
- (6) 既応歴 特記すべき疾患なし
- (7) 経過 発熱・倦怠・動悸で某医院に入院、貧血のため輸血を受けたが、出血傾向現れ当科に入院。入院時出血傾向著明(鼻出血・皮下点状出血)、貧血強度であった。(Hb28%)、ステロイド漸減療法と輸血が行われたが、途中よりDCP療法と輸血の治療に変更となった。入院後3ヶ月4 cur試みて、緩解導入に成巧した。その後緩解強化及び維持療法輸血を行っていた。
- (8) 観察期 7月状態良いため、家の近くの病院へ転院決定し、最後の強化療法を終了した。血液所見は良好でなく、食欲低下・全身倦怠感等を訴えていたが、腸内感染を起し、4日目の午後死亡した。(表①, ②, ③)

DCP療法（緩解導入療法）

1日目	ダウノマイシン(D)	キロサイド(C)	プレドニン(P)
1日目	40mg	80mg	80~90mg
2 "	"	"	"
3 "	"	"	"
4 "	"	"	"

上記を1 cur とし、2週間に1 cur

緩解維持療法

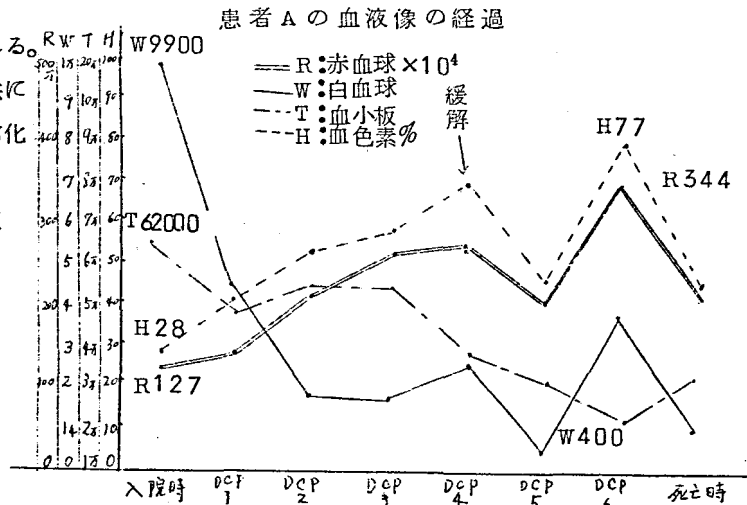
6 MP Methotrexate Endoxan Predonin
(100mg) (7.5mg) (150mg) (30mg)

の順で1週間交替で使用した。

緩解

白血病の場合に良く使われる。自・他覚的症狀の減少と共に末梢血及び骨髓所見の正常化した状態をいう。

（具体的な治療効果の判定規準は省略する）

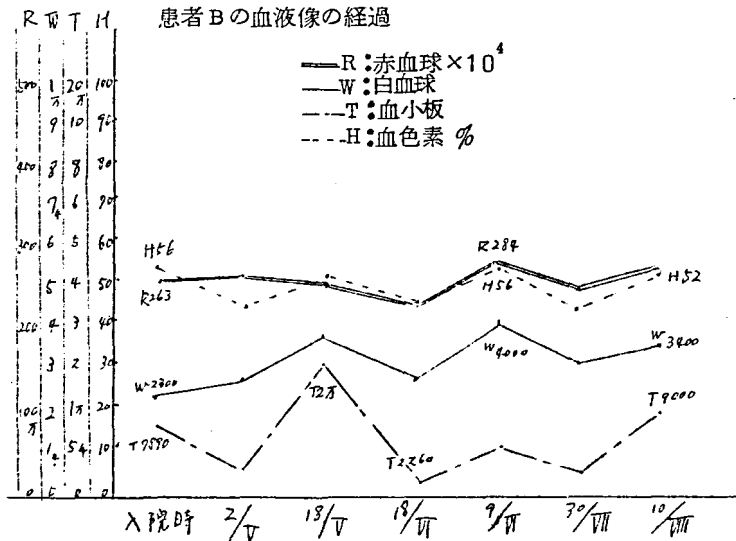


2. 患者B

- (1) 氏名・年齢 H・K 16才 女性 高校2年生
- (2) 入院年月日 S48. 4. 12
- (3) 病名 再生不良性貧血
- (4) 背景と性格 父を一年前胃癌でなくし、母・祖父母・弟の五人家族。甘えた所があり、依頼心も強く、年齢より幼稚な面がある。
- (5) 家族への説明 祖父・母親には本当の病名を知らせた。同時にいつ大出血を起すか解らないこと。本人には貧血症と云っている。
- (6) 既往歴 中学より癩癩 治療続行中。
- (7) 経過 S47. 12月頃より動悸、息切れを自覚。S48. 2月、鼻出血、止血しにくく、40°Cに発熱。即日某院入院。ステロイド、抗生物質、輸血にて解熱したが、出血傾向、再

度の発熱を見る。ステロイド大量療法にて解熱した。3月12日当科入院。治療はステロイド大量療法、止血剤、輸血であった。性器出血、鼻出血、皮下出血、頭重、嘔気症状があった。4月～5月、全身倦怠感、鼻出血、食欲低下の症状続く。

(8) 観察期 7月結膜下出血、鼻出血、点状出血おこし易く、病勢は依然として活動期にある。

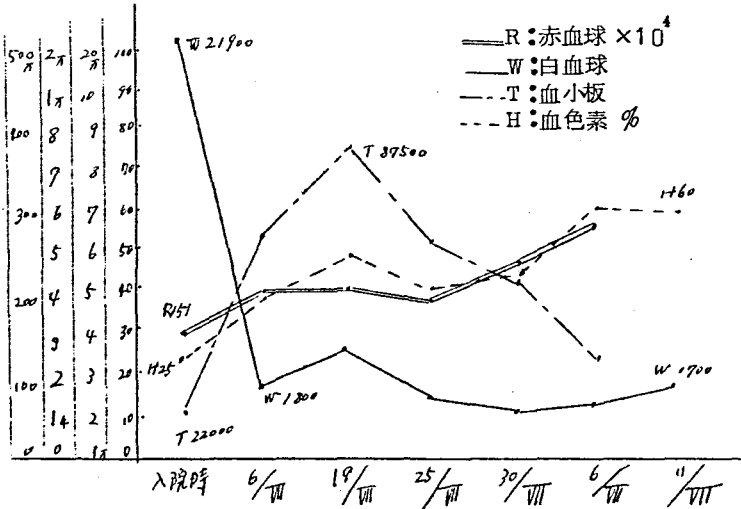


3. 患者C

- (1) 氏名・年齢 J・M 17才 女性 高校3年生
- (2) 入院年月日 84.6.29
- (3) 病名 急性骨髄性白血病
- (4) 背景と性格 両親・妹の四人暮らし、性格は明るく、友人も大勢いる。
- (5) 家族への説明 父親には本当の病名を知らせた。母親は、父親から聞き、大体知っている様子伺える。本人には貧血症とあってある。
- (6) 既往歴 麻疹が重症だった他は、特記すべき疾患なし。
- (7) 経過 本年4月 嘔気、階段昇降時の息切れを自覚。2ヶ月後 眩暈、疲労感強度となり、当科受診。4日後、39℃に発熱、黄疸出現し、緊急入院する。輸血、ステロイド、抗白血病剤の治療開始。6日後には黄疸消失、解熱、一般状態良好となるも、眼底出血著明にて、安静命ぜられる。
- (8) 観察期 抗白血病剤、ステロイド療法により、白血球極度に減少のため投与中止となる。再度発熱を見る。ステロイド維持療法と、輸血に変更した。眼底も正常に復帰し、徐々に活動の制限はなくなった。8月6日頃より脱毛が激しく、皮膚科の治療を受けている。

生理もほぼ正常にあり、緩解期に入っている。

患者Cの血液像の経過



III 看護経過

1. 患者A

(1) 問題点(初期)

- a 病名を偽っている。
- b 緩解期とは言え、血液所見良好でない。
- c 転院を、間近に控えている。
- d 将来に希望を持っているが、病気に対する不安感も強い。

(2) 目標 受験という患者の希望、期待を持ち続けさせ、無事転院させる。

(3) 計画

- a 一般状態の観察
- b 二次感染の予防
- c 言動の統一をはかり、精神的援助につとめる。

(4) 実施及び結果

先にあげた看護計画の中の、cについてのみ報告する。

対象に選んでから1週間という、短期間であった。転院も決定し家の近くに帰れ、嬉しそうであったが、本人自身、血液所見にも精通し、不安感も抱いていた。しかし転院という一歩前進した様な、浮き浮きした気持が大きい様であった。今まで病室をあまり出な

かった患者が、「看護婦さん一人一人の思い出を作るのだ」「僕のこと忘れないで！」等言いながら、自から会話を求める時もあり、スタッフ全員が、各々の個性で、心よく応じた。「本当に治るだろうか?」「そう急には治らないけれど、若いんだもの、絶対に治るよ。」こんな言葉で納得しないのを知りながら、嘘の言葉に罪悪感をぬぐえなくどうしようもない看護の限界を感じる時もあった。患者自身は、楽しい毎日の様子であった。一転して最後の4日間、急激に現れた、発熱、腹痛、全身数ヶ所にある皮下出血部位の疼痛・嘔気・嘔吐と悪化の一途をたどった。父親はかけつけていたが、全て、看護婦の手を必要とした。「もうだめだ。」と言いながら苦しむ患者に「大丈夫・頑張らなくては!」全員が、ベットサイドで語りかけ。勇気づけた。個室に移るのも、スムーズに受け入れ、死を受容してか、見守る人々に笑みかけていたが、その直後、極端をおこし、意識不明となり、一時間後死亡した。

結果として、状態の激しい変化に後半は、看護計画も立てずに、経過してしまった。看護の援助も、その時々に応じた、全身の苦痛を注射や処置で解決してしまひ看護、はげましに終わってしまい、精神看護に至っていたのか、解らなかった。

2. 患者B

(1) 問題点

- a 病名をいつわっている。
- b 出血傾向がある(鼻出血、皮下点状出血)
- c 自覚症状もつよい。(全身倦怠感・頭痛・食欲不振)
- d 症状・言動に敏感でくよくよし、泣き出し、閉鎖的になる。

(2) 目標

- a 回復への意欲と自立心を高める様にする。
- b 現時点での生活を出来るだけ安楽なものとする。

(3) 計画

- a 身体的苦痛の緩和をはかる。
- b 一般状態の観察
- c 二次感染の予防
- d 言動の統一をはかり、精神的援助につとみる。

(4) 実施及び結果

患者Aと同様、計画dについて報告する。

病状は活動期にある患者であり、自覚的には、結膜下出血、鼻出血、頭痛、倦怠感等あ

り、苦痛の様子だった。笑顔はあまり見せず、涙を流している姿を見せるが、看護側には閉鎖的であり、付添っている母親が、代弁する事が多かった。その様な状況から、患者に語りかけ、患者自からの返事を待つ様にし、検温時、その他の機会の会話を毎日記録し、心の中を知ることにした。

・以下はプロセスレコードの一部です。

7月24日 点滴時

看護婦

患者

①鼻血はどよう?

②まだすこし出ます。

(閉眼したまま)

③眠いの?

④眠いんです。(閉眼したまま)

⑤昨夜眠れなかったの?

⑥いいえ、そうでもありません

(閉眼したまま)

⑦眼の方はどよう?

⑦昨日よりいいです。

7月28日 検温時

看護婦

患者

①いかかですか?

②鼻血が出てしまっ

③でも、もう止っているでしょう?

④ うん、でも、大分出たでしょう。

⑤血液の方も鼻出血ぐらいだったら、そんなに変化しないと思うけれど。

⑥そうですか?先生は35%って言っていましたよ。先週は41%と言っていたのに、変化ないんですか。

⑦先生が、本当にそう○○さんに言ったの?

⑧そうですよ、回診の時に言うんですから、嘘なんて、言えないでしょう。本当だと思いますよ。

⑨そう、じゃあ回診の時聞いていて!!

⑩そうですよ。

以上の様に、何回かの語りかけにより、返答にも内容が加わって来た。が時により、指で答えたり、うなずきだけの時もあった。プロセスレコードより得た問題点は。

a 鼻出血が時々あり、不安が強い。

b 貧血の数値に、敏感になっている。

c 微熱、倦怠感、頭痛、症状により、閉鎖的になる。

d 太ってしまったこと、顔面アクネに気づき嫌だと思っている。

e 輸血を沢山して、速く治して欲しい。

aからeの問題点について主治医をまじえたカンファレンスを持ちながら、解決していた。

aについて、血小板が少ないためであるも血小板が増して来るのは最後であること。

bについて、回診の時に読み上げる数値を聞いているのですが、嘘を言うことも出来なく、血小板減少傾向は、ゆっくりになって来ていること。

c、dについて、病気がすべて作用していること。一日中病気のことばかり考えている。生活はすべて床上であり、母親が付添い、全て母親まかせの点もあった。この様なことから、本を読む、絵を画く、唄を歌う、ラジオを聞く等。出来るだけ楽しめる様、すすめてみた。時には、母親に帰ってもらうことにした。

eについて、輸血は血液を造る力を、かえて弱めてしまう事もある。状態を見ながら行う。

a, b, eは、医師から患者に説明された。

結果として8月に入り鼻出血の量も回数も減り、医師への不満も一言も言わなくなった。自覚症状についても「それ程でもありません」等と、以前と違う返事が帰って来たり、看護婦に話しかけ、笑顔を見せる様になった。カーテンの中で、好きな唄を歌ったり、絵を画いたり、折り紙を折る姿が見られ、明るさが見えて来た。母親が日中帰る日もあったが、トイレのプザーを自分から押すと言う積極性は、まだ見られない。病気の好転が全て、左右している様にも思えるが、話しかけ、心の中を開かせた効果もあったのでは、とも思う。

3. 患者C

(1) 問題点

- a 病名をいつわっている。
- b 身体的苦痛はあまりないが、安静が必要である。
- c 症状の変化により、精神的に激しく動揺する。

(2) 目標

- a 病気を悪化させることなく、緩解期に導入させたい。
- b 現時点での生活を、出来る文、安楽にする。

(3) 計画

- a 一般状態の観察
- b 二次感染の予防
- c 言動の統一をはかり、精神的援助につとめる。

(4) 実施及び結果

患者Bと同様、プロセスレコードをとることにした。計画Cについてのみ報告します。

病状は初期であり、病気に対する知識も、あまりなく、出来るだけ不安を持たずに、病気も知ることなく、過して欲しいと思った。

これから発表するプロセスレコードは、2日前発熱があり現在解熱している。又安静の毎日である。

7月27日 検温時

看護婦

患者

- | | |
|---|--|
| ①体の痛いのだろう？ | ②痛くない |
| ③あの日一日だけだったの。 | ④うん、夜少し痛かった。 |
| | ⑤（お母さん）輸血を又するからって嫌がるんですよ。 |
| ⑥輸血するの嫌なの？ | ⑦（横を向いて、うなづく） |
| ⑧どうして？ | ⑧この間で、もう止めかと思ったら、又やるなんて、じゃこの間のが、なんにもならなかったって事じゃん。何時帰れるだ!!（お母さんに怒る様に言い泣きだす） |
| ⑩この間は何本やったかしら？ | ⑩（お母さん）8本 |
| ⑫血液の様子見ながらやるんだしね、8本やったから黄疸もとれたし楽になったでしょう。1回に沢山やって、それで終いと思っていたの？ | ⑬うん |
| | ⑭眼科は今日止めですか？ |

⑮延期ですね。輸出もあるし。

これらのプロセスレコードから得た問題点は

- a 再度輸血するということが、状態の好転のないことを、悲観している。
 - b 安静の毎日が、やりきれない。
 - c 顔面アクネ、頻脈、脱毛に気づき出した。
- aからcの問題点につきカンファレンスを持ち、解決していった。
- a、cについては、主として医師より、輸血の必要性、薬の副作用、貧血状態等患者に説明された。

bについて、感染予防（ステロイド使用、白血球減少）と貧血状態から考えると安静にしている方が良いが、許せる範囲でどうであるか、安静度は眼科受診にて決定することにした。

結果として、医師からの説明も手伝い、患者自身も動悸、頻脈など自覚、輸血も受け入れるようになったが、一番問題を解決してくれたと思われるのは、眼底がほぼ正常に復帰し、安静がとかれたことであった。8月脱毛が現れ、皮膚科受診にしても原因ははっきりせず、抗白血病剤の副作用も考えられた。女性であり、ショックも大きく、慰めの言葉も白々しく、観察にとどめた。現在カツラをつけ、表面的には落ついて来た。

IV 考 察

以上三つの症例の精神面の極く一部分について発表した。思春期は、自我の発見、確立という、大切な時期であり、情動的にも感受性が強く、敏感で動揺しやすいという特徴を、持っており、又知識欲も旺盛である。病気を知るための材料は、患者どおしの会話の中から、書物、マスコミと容易に入手出来る。更に、大学病院独特の回診と、私達が必至で口をつぐんでも、どうしようもない物がある事を知った。三人には私達が触れることが出来ない精神面がまだ多くあるのだと思う。今回プロセスレコードを取って見たのは、初めてであった。今後、患者の心理分析、看護婦の応対が適切であったか等、検討して見る必要もあり、看護面接の大切さと難かしさを知ることが出来た。